

貞門俳諧の諸問題

——重頼(維舟)と宗因の關係について——

中 村 俊 定

私がこゝに松江重頼と西山宗因との關係を考察して見ようとすることは、貞門俳諧はいかにして談林俳諧へと展開したかといふ研究課題の基礎的な一つの仕事としてである。

従来談林風は俳諧に承譜をもたない西山宗因によつて提唱された異体新風で、延宝年間に入つて全く俳壇の支配的勢力を獲得してしまつたやうに考へられてゐる。このことは結論として誤つてゐるものではない。しかし談林風は古風(貞門)と全く異質のもの——たとへば談林と蕉風との相違——であるかの如き印象をわれわれに与へる。そして貞門俳諧は半世紀あまりの長い期間、あの退屈な類型を繰り返して何の發展も進歩もしなかつたといふことを考へさせるものである。しかしそれは俳諧史家が、芭蕉研究にポイントをおいて蕉風展開を考へることに急であつて、貞門俳諧を具にながめるゆとりをもたなかつたがためであると思ふ。

俳諧を庶民文芸として考へる時、われわれはこの文芸様式を庶民大衆が如何に支持して来たか、いかなる受け入れかたをして来たかを資料の実際に見なければならぬ。

芭蕉や蕪村を今日の文芸觀によつて批評することもそれ自身と

して大切なことであるが、芭蕉や蕪村の背後に、滔々として流れてゐる庶民大衆の娯楽としての俳諧が、いかなるものであつたかも文学史家は考察をおろそかにすべきではない。そしてその流れの露頭としての芭蕉や蕪村を考へなければならぬ。貴族や武家の文学ならばいざしらず、俳諧が庶民文芸として意味をもつかぎり当然払はるべき注意である。さうした意味において狂歌や前句附、雑俳や川柳なども亦切離して考へらるべきではない。

貞門俳諧がいかに文芸性が低いものであつても、近世初頭においていかに多くの支持者をもち、たとひ消閑の具としてでも汎く庶民に愛せられて来たことは意義のあることである。ましてそれが後の談林・蕉風を展開する契機をはらんでゐたとすれば、その実態の究明は意義あることでなければならぬ。

重頼(維舟)と宗因との關係については、維舟が自著『時勢粧』(寛文十二年刊)第五に収めてゐる宗因難髮出家(寛文十年二月十五日豊前小倉広寿山即非和尚について出家)を祝して送つた独吟百韻のはし書に

彼人（宗因）もとは肥の後八代の生れなりしが、二八の比より連歌の道に心ざし、遙にのぼりて京人となり、里村氏の家を尋て學寮あればすなはち入より、わたり近き予も折ふし毎に連歌のちなみ浅からざりし、又萬治の比より俳諧の会合斜ならず、招まねかれて京大阪へも打つれいとむつまじかりき。うちつけのむかしを思出るに、いそぢの春の曙夕暮を、あるは一封の書狀にたはぶれ、あるはたいめして下の心を靜にさゝやきけるに云云

と記してゐる。これによると宗因との關係は五十星霜の永きに及び、かりに正確に宗因十六歳の時とすれば元和六年で、重頼は三歳年長で十九歳の時にあたる。こゝに云ふ里村氏とは懷惠庵昌琢のこと、宗因が上京したのは恐らく主君風庵（正方）の命による連歌修行のためであつたと思はれる。このことを裏書する資料として私はかつて『宗因十八歳の連歌』（應安昭和十年六月号）として元和八年三月十二日大坂淀屋三郎衛門興行の昌琢一座百韻（宗因は豊一として付句四）、同年四月紀州三浦長門守（為春）興行の昌琢一座の五十韻（宗因付句三）等を紹介しておいたが、宗因は以来寛永十三年昌琢が歿するまでつねに昌琢一座に連つて連歌を行つてゐる。重頼の名はしばしばこの一座の中に見出されるのであるが、當時同名の飛騨高山城主出雲守金森重頼（某入金森宗和の弟）が昌琢門の連歌に出席してゐるので、これを直に松江重頼と断じ難いが、彼が屢々貴顕に出入してゐるところから察して、當時彼も宗因と共に連歌修行をしたことは想像される。

しかし重頼はその性格からいつて到底連歌にとゞまるべき人では

なく、當時流行しはじめた俳諧に心をひかれ、寛永の初頃から貞徳・徳元・立圃などに近づき、俳諧師たらんと志したらしく、連歌師として身を立てんとした宗因とは自ら遠ざかつていつたものと思はれる。

この間、宗因は主家退転の事があり、主君正方と共にその浪々の身をなげき、又師昌琢の死に遭ふなど、まことに身辺多事であつた。

それに引き比べて重頼は、寛永八年には貞門最初の撰集『犬子集』の撰に着手、前後三年の年月を費して完成し、同十五年には『毛吹草』（五巻）を撰ぶなど、着々とその俳壇的地位を築いていつた。しかもこれらの撰集をめぐつて立圃や正章（貞室）或はその一派の人々との間に確執を生じ、論戦を展開するなど、これ又多事多彩な生活を送つたのであつた。

かくて正保四年秋、宗因は連歌師の功をつんで里村家から推尊され、大阪天満宮連歌所の宗匠となり、天満宮のほとりに移居したと伝えられる。

註、この天満宮のほとりへの移居について慶安元年秋とする説（大阪天満宮社伝）があるが、『本朝文鑑』所載の「告天満宮文」には「正保の末のとし長月の比」とあり自筆の『有芳庵記』にも「正保の末のとし長月の比」とある。頼原博士は社伝によつて「正保の末の年」を正保五年の事とすべきであるとして居られるが正保五年は二月十五日に慶安と改元になつてゐる。九月とするとすでに改元されて半歳もたつてゐるし、同じ『有芳庵記』に「かくて十年ばかりにやなりけん」としる

してゐる。『有芳庵記』は明暦二年九月二十日に記したものであるから、逆算すると正保四年にあたる。杜伝の確実性が証せられないかぎりなほ疑問とすべきである。

西山家三代の連歌発句を輯めた『三續集』(享保十九年刊)の秋之部に

大坂住宅の始、天満宮の会に

淵と成むよるべの水や菊のつゆ

とあるのは頼原博士の言はれる通り、その折のものであらう。なほ『有芳庵記』によれば明暦元年の冬、「所をかへてすこしほどへだたる」ところへ移つたらしいが、もろ／＼の人々の助力を得て、再び天満宮の傍に庵を立てて移つた。これが即ち向栄庵である。時は菊月の半ばで

神やうけしつゝによるべの菊の水

淵は瀬となる世もあらじ衆人の

なさけをきける菊のしら露

と記してゐる。

重頼の撰集『懷子』(十巻、明暦二年起草万治三年十月刊)に

一幽興行(註、一幽は宗因の俳名)

浅みこそ袖はぬれ驚の菊の淵

とあり、更に付句の部に

浅みこそ袖はぬれ驚の菊の淵

一河のながれ長月の友

と宗因の脇句をのせてゐる。ところが先年天理図書館綿屋文庫に

おいてこの完全な一卷を寓目するを得た。

あさみこそ袖は濡驚の菊の淵

一河のながれ長月の友

見る人もおもしろやなに崩きて

紅葉を風のかけはしの爪

峯越てゆけば手足も冷るまに

時宜して悔し門出の酒

此辺に寄て休ん宿もなし

途中の雨のかゝるめいわく

着る物のうら珍しや尻からげ

武士めかせたる町人のふり

以下略

大文字屋
重頼 十二

大坂天満
宗因 十三

似春 十一

大坂松山氏
秋也 十

顯成 十

大坂
祐是 九

忠田 九

保友 八

三政 八

大坂
宗立 九

執筆 一(註) 忠由は谷氏、宗立も共に大坂の人

この巻は延宝二年刊の宗且撰『遠山鳥』にも収められてゐることを杉浦正一郎氏が雑誌『上方』(昭和十三年八月号)に紹介し、一順と句数とをあげて居られる。(たゞ第三句目の作者が弘永となつてゐるのは不審である。)

『懷子』の発句のはし書が示すところによつて宗因の居においての興行であることは明かであるし、発句と脇句が共に前記『有芳庵記』の末尾にするす宗因の句に因みあるところから、これは恐らく重頼が宗因の向榮庵新居を訪れての興行であらうと思はれる。彼等の俳交は更に二年遡ることが出来る。それは承応三年十月三日に催した次の百韻が同じ写本（天理図書館蔵）に書留られてゐる。

宿からは芦火とくをけ難波人

そとろに袖の寒き舟つき

釣あげし香はあれど酒なくて

けふの遊びの興さめてけり

ねぶたきを打忘れたる名月に

島の芋をぬすみにやこん

秋風に背戸の藪垣吹ききて

軒に雀のおどる暮かた

ッ日あたりを見れば人けのうとかれや

重頼

宗立

一幽

三政

猶白

保友

定房

可哉

祐是

以下略

重頼 十二 一幽 十三 猶白 十 定房 十一

祐是 十一 宗立 十二 三政 十二 保友 十

可哉 八 直長 一

又この前後のものと思はれるものに

大坂中之嶋にて（大坂保友亭）

寒からし魚と水との中之嶋

重頼

とはるゝかたは雪の北濱
保友
一幽
芦ぶきを興にかこひの梅いけて

又あふ坂で気をも関水
重頼
一幽
さねかづらくるといなやに見付られ

手習の憂きに杖とる師のいさめ
重頼
一幽
三尾線の音もならぬ小めくら

×

於天満一幽亭

重頼

梅いけて床めづらなり難波人
などが『懷子』に見出される。『懷子』は板行は万治三年であるが、

自跋によれば、十余年来採拾して来たものといふのであるから、

これらの作品は承応・明暦頃のものと思はれないこともない。

前掲『時勢粧』の万治の頃より俳諧の会合斜ならず、互に京・

大坂へ招き招かれたといふ言葉は信じてよからうと思ふ。

宗因の当時の俳諧は彼の『懷子』に最も多く見られる。中でも注

目すべきことは、延宝元年に板行されたといふ『西翁十百韻』即ち『西宗因千句』（二冊）に収められたる独吟の中に

梅の花見に

とへば匂ふ梅や自身の取合

を発句とする百韻一巻と

大坂にて

つぶりをもうつは隣の礎かな

を発句とする百韻一巻から付合が十数句づゝ『懷子』に抜抄されてゐることである。これはこの百韻二巻が既に万治三年以前に作られたことを証するもので、宗因が俳諧に専ら興味をもち初めた時期を知る上において重要な資料である。その他この『懷子』には、寛文六年刊の『俳諧独吟集(重徳撰)』に収められてゐる

ながむとて花にもいたし頸の骨

一幽

を発句とする百韻一巻から付句約三十が抄録されてゐる。この発句は既に万治元年刊の『牛飼(燕石撰)』に出てゐるものであるが、これによつて当時この百韻が出来てゐたことを証することが出来る。なほ出典不明の付合が百四十余句収録されてゐるが、これを以てしても、当時宗因がいかに俳諧に熱を入れてゐたかと思像される。そしてそれが多分に重頼との交渉が頻繁になつて来たことによるものであることが想像せられる。

宗因の俳諧資料として年代の最も古いものは、かつて藤井紫影博士が紹介せられた承応二年の津山紀行の

文月やめでたくかしく泊舟

あかし船一夜かぎりか朝霧か

舟便にやらんやらめでた文月夜

すゝ虫やりんもまじらぬなまり声

馬草にそへてくはるな響虫

山里はものゝさび鮎一種かな

の六句で、次にあげられるものとしては明暦二年の歳旦、『古歌に

いはく千年ぞみゆるかゞみ餅(知足才旦)と、藤山休安撰『夢見草』にのせる発句五、付句二である。同二年の歳旦に『新春のこ』と葉はふるき御慶哉(知足才旦)万治元年梅盛撰の『捨子集』に『難波津の昨夜の雨や花の雲(この句知足才旦集には万治四年とす)』は宗因としては初期のもので所謂貞門の古風である。

『懷子』にのせる発句も

いろはに穂への字なりなる薄説

いかなく花も今夜の月一輪

竹子の一寸のふれば千尋説

の如き古風の句もあるが

ながむとて花にもいたし頸の骨

からし酢にふるは涙か桜だい

今こんといひしばかりの料理説

鴨あつうしてや料理の水いり菜

のやうな奇抜な本歌取や、後の宗因を思はせる

な折そとしかるに一枝花の枝

宇治にて

里人のわたり候かはしの霜

播州にて

雪の松曾根は久しき名所説

の如き句が見える。

発句に比べて付句は自由奔放で、すでに談林風はこゝに萌してゐるといつてよい。

脳目もふらず紅葉随分

鳴鹿の声きく時ぞうつ鉄炮

一幽

花も今さきの相国御成にて

一幽

門田の稲葉不出來なる比

見る月はよしや芦屋の亭主ふり

一幽

月より白きさらし何端
山みれば大滝小滝花の滝

一幽

涙の川をおよぎこさばや

思ひかね妹がりゆくははだかにて

一幽

紅顔の粧もたゞそつとの間
をんなをどりは男なりけり

一幽

せむる霜夜の女夫いさかひ

きりくす鳴ほど腹や立ぬらん

一幽

難面もちとはがつてんしかりて
爪くはへてもかはすかねごと

一幽

宿かへをするこやの里人

芦茨隙こそなけれ日用取

一幽

とかく夜這か又盗人か
独居は妻戸のなるも氣にかゝり

一幽

はかりがたしや伝教の智恵

あのくたら三百石の未進米

一幽

かるかやといふもむさくさはへ出て
道心者にはいらぬ大髭

一幽

鈴木てふ人は昔の春なれや

我身ひとつのなますこひしき

一幽

武士めかせたる町人のふり
舟ちんを出さねば出さぬ渡守

一幽

ねらひよる稲葉に雀はらめきて

芦の丸屋をはなれ野等猫

一幽

湯あみるせなかほのかにぞみる
此あととはもしは灸か腫物か

一幽

濃茶身にしめ吞し入道

鯨くふつ甘酒吞つ瓜くふつ

医者にあふての先物がたり

一幽

以上は『西翁十百韻』中の二巻と『なかむとて』の巻以外の付句を『懷子』から拾つたものであるが、これらの付合は寛文初年の作と思はれる『西翁十百韻』の他の百韻の付合と全く同じゆき方で、特に目だつ特徴は古事・本歌取りである。本歌取りすでに貞徳以来の手法であつて、多少とも当時の知識階級に属してゐた彼等貞門俳人の得意とするところであつたが、彼のは本歌のとり方に一つの新しさが見られる。すでに指摘せられてゐるやうに、宗因の俳諧は万事を滑稽視してかゝる態度（これは見立の奇抜さ）と一句の構成が、ある一つの觀念と他のかけはなれた觀念との結合の仕方であり、一つの觀念から意外な方向へ忽然と転ぜしめ、その矛盾に笑をかもさせるといふ手法で、この二つは宗因流の特徴であり、談林派はそれを強調していつたものである。

連歌練達の士である宗因は、その豊富な古典の知識と、市井に住んで得た庶民生活の体験とを以て、自由奔放に俳諧をこゝろみたのである。

重頼は『毛吹草』撰以来、正章（貞室）一派と仲悪しく令徳・西武等貞徳直系の人々から異端視されて孤独であつたが、貞徳流のマンネリズムにあきたらず強引にその意慾を俳諧に打ちこまうとした。財力もあつてか『懷子』十巻は自ら板下を書き自費を投じて板行したらしく、以後寛文四年に『佐夜中山集』七冊（？）寛文十二年に『時勢粧』七冊を、更に晩年に至つて延宝二年大

井川・藤枝集（三冊）延宝四年に『武蔵野』二冊延宝七年七十八歳の老齡をもつて『名取川』三冊を撰してゐるが、何れも自筆の板下である。なほ若海の俳諧書籍目録によれば、延宝六年に『溜池河御座』未発見、『江戸水道』未発見を板行してゐるといふ。その旺盛なる意慾は驚くべきものがある。しかもこれらの作者の大部分は宗因をはじめ談林系に接近していつた大阪・堺派の俳人、伊丹派系の俳人で占められて居る。若き日の芭蕉宗房も季吟よりもこの一群に投じてゐたのではないかと思ふ。（維舟の『佐夜中山集』に収められてゐる宗房の二句は現在資料においては最も古いものである）蕉風前期の新進俳人池西言水や鬼貫が、重頼を自らの師と称してゐるなど、彼は談林・蕉風展開の上で大きな役割をしてゐるやうに思はれる。

さて私は再び『懷子』について述べなければならぬ。

『懷子』は前述の如く重頼が『毛吹草追加』正保四年刊・三冊以来採拾しておいた自他の句を編輯したもので、思ひ立つて以来四ヶ年余で完成したものであるが、収められた発句に一々本歌をあげ、本歌の次にこれも同じ本歌、どりの連歌の発句がかゝつてある。（連歌の発句は全部にわたつてではないが）付句もほとんど本歌のあるもので、引かれてゐる本歌は、万葉、古今、新古今、拾遺、後撰、後拾遺、千載、金葉、玉葉、新勅撰、詞花、新後撰、続後撰、夫木、壬二集、拾玉集、続古今、新千載、山家集、藻塩草、続後拾遺、新拾遺、自讃歌、龜山殿七百首、新拾遺、菅家、源三位頼政、歌林、月清集、長秋歌藻、新続古今、六帖、風雅集、

六百番歌合、堀川院百首、新後拾遺、古今序、土左日記、伊勢物語、源氏物語、枕草子、宇津保物語、大和物語、徒然草、方丈記、宇治大納言、催馬楽、朗詠、風俗歌、盛衰記、八雲御抄、無名抄、奥儀抄、拾遺風林抄、井蛙抄、古語拾遺、日本紀、百聯抄、白氏文集、琵琶行、長恨歌、蒙求、古文真宝、文選、史記、前漢書、後漢書、北史、周易、論語、大学、中庸、小学、老子、莊子、荀子、列子、毛詩、錦繡段、事文、礼月令、事實全書、勾府、庭訓往来、古詩、三休詩、句巾紙、李白、山谷、杜子美、東坡、山海經、大論、法花經、実語教、五燈会元、碧巖錄、日蓮御書（順序不同）その他にわたつてゐる。しかし中では三代集、源氏・伊勢等が大部分で、連歌師の教養をうけてゐるものであれば珍しいことではないが、八代集以後その他和漢仏書に至るまで、たとへ人口に膾炙したもののみものとは言へ、本歌の範圍を拡げたといふことは尙學であるにしても興味あることである。

俳諧がいかに俗語で、彼等の身ぢかな事柄をよむものだといつても取材には自ら限界がある。彼等の生活環境は單調である。しかも太平の世となつて安易な現実生活がつづけられてゐるところにたくましい空想力も想像力も持ち得ない。しかもかざられたる詩型に曲折を求めようとすれば古典の知識による他はない。季吟はかうした俳句作者達への便宜のために註釈事業をはじめたといつてゐるが、江戸初期の學問の振興は、案外かうしたところに推進力があつたのかもしれない。（貞門俳人の學問については又別の機会に考察することゝしたい）

故事・古歌にその発想を求めることは季吟など大いに主張してゐるところであるが、この『懷子』の作者達の方法とは多分に相違が認められる。それが重頼を中心としたグループによつて次第に發展させられたのではないかと思ふ。前に述べた宗因の特質はやがてこの重頼一派の、極端に言へば撰者の好んでした風だとも言ひ得よう。

こゝに『懷子』に重頼が採拾した句をあけて宗因の句と比較して見よう。

明けぬればくるゝ物とやお年玉
雨のしたのどけかるべし馬がつば
かいだるし莖つみにとこしの骨
命あらば何か別の金佛
ねはん会や春のものとして長談義
もゝ尻や大宮人のさくらがり
もろ白でははれと思へ山ざくら
花は根に鳥は古巢に卵哉
妻こふる猫ぞ鳴くなる花鱈
蚊さへいなばむせぶも嬉し夕煙
もえ果てけさは蠅飛蚊遣哉
枕より跡よりせむる蚤蚊哉
玉まつる今日は人こそかな仏
今こそあれわらも昔は稲庭
いかならん間なく時雨の古かつば
ながむとて花にもいだく手樽哉

作者不知
正俊
得松子
玖也
俊佐
任口
宗立
芳心
常立
顯成
玖也
安重
作者不知
朝雲
盛之
安敬

駒とめて払ふな雪の袖がつば
料理して今日もくらしつ様だい
鳴神もさくる物かは古蚊帳
あはれしれ夜々に振にしかけをどり
とんぼうや程は雲るに中がへり
都では苗代見しか秋田米

古郷へもどる下女の出替
錦かと赤まへだれをかすませて

初瀬の寺にいのりそこなふ
うかりける人にはげしくしかられて

絶ぬ泪の雨や鮫はだ
擬も命有ける妹がはしかして

亥なりけり命なりけり
やせこけて又肥べきと思ひきや

一封の書状に涙包こめ
古郷の妻にやるかねはなし

わがせし仕事多くこそあれ
あつさ弓真竹の弓で締うちて

作者不知

重頼

重頼

重頼

重頼

重頼

保友

慶友

令巾

作者不知

作者不知

重頼

下帯の色好なる旅姿

井手のさにてきくやあだ口

重頼

しのぶも恋の名はばつと立
玉の緒よ絶ね我身は塵ほこり

重頼

三里ばかりや須磨の浦道

亥にも塩やくけぶり風をいたみ

重頼

うつゝぬかせる今日の野遊

酒過てよろめく足のはぎ原に

重頼

山城のとはに逢たや又見たや

瓜ざね貌のわすらればこそ

重頼

いやしげの茄子歯はへし小姫ござ

重頼

これらはすべて本歌のもちりによつて笑ひを催させるものであるが、本歌には一語二語にかゝりを得てゐるだけで、本歌とは全く別のあらぬ方にその意味をもたせてゐるので軽妙な感じを与へるものである。宗因ほど巧妙ではないにしても、彼等の一派がかうした傾向のものをとりあげてゐたといふことは注目すべきことである。

重頼と宗因の俳諧の交りは大体宗因が難波の天満宮のほとりに移居した頃にはじまると思ふが、貞門俳諧もこの明暦万治の頃一

つの転換期であつたのではないかと思ふ。そしてその転換の動機が重頼と宗因の交友が大いに与つて力あつたものと考へる。重頼が宗因に影響を与へたか、宗因が重頼に影響を与へたかはにはかは断じ難いが、常に貞門正統派に反撥して来た進歩的な重頼と、俳諧に柔諧をもたない自由な立場の宗因とが少年時代の因みによつて一層相寄り共鳴して、新風に赴いたことは想像にかたくな

ない。

私はこの時代をもつて俳諧の中心が京から大阪へ移りつゝあつた時代と考へる。そして寛文・延宝時代の町人文化隆盛が談林俳諧を形成していつたのであると思ふが、それは決して貞門俳諧と異質のものでなく、貞門俳諧のもつてゐた一特質が強化されていつたものだと考へる。そのあまりにも都会的な特殊性は、やがて地方に浸潤しつゝあつた俳諧との間に大きな断層を作り孤立し遂に行きつまつてしまつたのである。しかし談林俳諧が一方に西鶴の浮世草子を生み、他方蕉風を展開する契機をつくつたものとしてその史的意義は勿論認められなければならない。

※ ※

その後重頼と宗因との関係は『懷子』以後も晩年までつゞけられたらしく、寛文三年十月十日興行の

世間に絶てさくらやかへり花

あかれやはする小春の土

折にあふ時雨もお茶もふりそひて

こゝろ高さや亭の伴ひ

致也
重安
西翁
春綸

百韻以下略（時勢粧）

の一巻を送り重頼に判を乞ふてゐる。

又寛文十年十月宗因の出家のことをきいて重頼は百韻を独吟して送つてゐるが、延宝三年には宗因は江戸からの帰途、維舟を訪ねて

夏の夜や東咄しに月は西

宗因

と吟じて、つきせぬ旅の土産話に夜をあかしらしい。其後延宝六年卯月の頃、維舟は旧友保友を訪れ、梅翁（宗因）旨恕、政寛等と百韻を巻いてゐる。（旨恕撰「わたし船」）

貞門正統派と戦ひつゞけて来た維舟は、延宝末年に至つてこの親友宗因の門流の急進派のグループに対しても一矢を報いずには居られなかつた。延宝七年の『俳諧態度』がそれである。もつとも談林の一派の放縱乱雑に対しては宗因も心をなやましてゐたらしく、俳諧の口を閉ぢむことを決意したとも伝へられるくらいであつたから、このことによつて友情を害ふやうなことはなかつたであらうが、宗因より二年前に歿した維舟への宗因の手向の吟がないのは何か事情があつたのであらうか。

なほ寛文・延宝時代の維舟と宗因との作品を比較することによつて、貞門・談林の交流とその展開とを考へる予定であつたが、身辺事情のため手が届かず、極めて粗雑なレポートに終つたことを残念に思ひ、他日を期して筆を擱くこととする。

（本論考は昭和二十六年度文部省科学研究費補助による研究の一部をなすものである。）